

アメリカに於ける現代思想と宗教研究（上）

佐々木 現順

本稿は私が一九六〇—六年度米國政府招聘フルブライト教授としてハーバード大學に屬し、ハーバード初め莫な十三の大學で講義或は見學する間に得た記錄の一部であり、フルブライト委員會へのレポートの一部の要約である。又アメリカより再度英・佛・獨・デンマーク等の諸大學を訪ね、曾つて在歐せし経験と比較して特に、反省した點について一、二の附言を與へておいた。

一 はしがき

さて、ヨーロッパと較べて、アメリカについて目立つことの一つはアメリカに近時隆盛になりつつある諸アジア研究機關と學者個人の思想がヨーロッパより遙かに強大な社會的支持の上でなされてゐることである。社會的支持とは國土・文化・地域的民族性を網羅するアメ

リカの基盤である。諸研究機關の活動をこの基盤との關係に於て把へるといふことは特にアメリカを理解する上に必要不可缺の事であると考へる。

先づさういふ試みの必要性を今後海外に出る學徒に希望するため、ここでは單にその一、二を指摘しておきたいと思ふ。

先づ地域的に言はう。ハーバードを中心とする東海岸、特にニューアイングランド地方は周知の如く、プロテスitanティズムの深い傳統の中に育つた。その地方はまたアメリカのIntellectualismの代表であると言はれもてゐる。元來、プロテスタンティズムは反逆的な歴史を經驗して來たが、ヨーロッパに於てはローマ教會、イギリス國教會、アメリカに於てはピューリタンの神政政治への反

逆といふ三種の宗教的反逆の歴史を持つてゐる。尤も、現在では、曾つて支配的宗教であつたコングリゲーシヨナリズムに對する如き反逆はニューイングラン地方には存しないようであるが、それでもなほ、エピスコパリアニズムの固い結束は否定すべくもなく、その根をはつてゐると思はれた。宗教的傳統精神は中部のケンタッキーリンシシピー、テネシー地方所謂バイブル・ベルトとあだなされる地方に於て一層強い根を大衆の中に植えつけてゐる。南部のプレスビテリアン、バプティストのフロンティア住民は宗教的には小さな役割しか演ぜず、近代工業の北部よりの南進の對應して宗教的なものが政治的世界へと浸し出して來た如く思はれる。西部は東洋人の最も多い地方でありながら歴史的に精神文化の發達はおそく、近代工業化が精神運動に先行しつつあるといふ狀態の如くである。シンシナティ大學での宗教・人文科學委員會でもテーマとなつたことであるが現代アメリカの Polarization は東部と西部に分れた偏向的發展を示してゐるのである。かかる文化的地域性を通じて言ひうることは建國當初の宗教的なものが大衆の中に浸透し終る前に近代工業と政治的世界への關心が宗教にとつて代つてしまつたのではないかと思はれる。ジエイムズ・ラッ

セル・ロー・エルが「ピューリタニズムはその信仰に宗教的自由の種子をもちこむことによつて、知らず知らず、民主主義の種子をもたらした」といふ時、その政治的民主主義が宗教にとつて代つたといふことを追加しなければならない。換言すれば、インテリゲンチャ及び宗教的なものと他方、大衆との落差が極めて大きいといふ點で、ヨーロッパ諸國とかなりの相違を示してゐると思はれた。

アメリカに於ける諸研究所及び研究の方向が單なる表面的な相でなく、アメリカ文化の地域性と傳統といふ mold の上で把握されうるならば、これに對應して我々の側からも融通性と耐久性を持つた業績が打ち出せるのではないかであらうか。今後、かくの如き背景への洞察を持つた學人の現れることを望みつつ報告の一部を記しつつある。

一一 シンシナティ大學 宗教・人文科學會議

六月十七、十八、十九の三日間、シンシナティ大學に於て行はれた人文科學會議は Frank L. Weil Institute for Studies in Religion and the Humanities 主催であ

る。招待された著名な學者は全米及びカナダにわたり、ハーバード、シカゴ、エール、カルフォルニヤ、ボストン、ルウイス、トロント、スタンフォード、ローレンス、ウェスタンリザーブアンドサビエル、ジョンホブキンス、インディアナ、オバリン、グンダービルト、フロリダ、ノースウェスタン、シンシナティ等の十九の諸大學であり、ハーバードよりの私を含めた六名を入れて四十名であった。

この會議は限られた學者による自由討議と研究發表といふ形をとつたもので、一般的學會研究發表ではない。

従つて、出席者は各界の代表的責任ある人々であつたために發表内容も専門分野に限られ、討議は全米に於ける宗教と人文科學研究の相互關係に集中し、斯界に於ける諸學者の問題點と同時に、アメリカに於ける將來の新しい方向を示唆する幾多の問題を提示してゐた。

議長ハーバード大學 Howard Mumford Jones の “Religion and Scholarship” と題する公開講演に續いて論究された諸研究の事から宗教學とインド文化に関する若干の發表を要約して擧げておこう。

セント・ルイス大學の Walter J. Ong, S. J. 教授の發表 “Microcosm and Macrocosm : Religion, Scholar-

ship, and the Resituation of Man” は宗教とヒューマニティとの關係を人とコスモスとの關係に還元し、兩者の結合を可能ならしめるものはコスモスに於ける人間の restituation であると論ずる。キエルケゴールよりボンティに至る intersubjectivity 及びブーバー、フェッサーの宗教的論作に缺けてゐる「人間と自然」との關係は實存主義の Angst に至れば、それの説く人間の内面性は Paleontology が人間の過去について報告してゐるものと何らの關係も持たなくなる。人間とコスモスとの unit は學問の限界内に於ける人間の restituation によつて可能である。かくて、人文科學研究に於て二つの傾向が現れてくる。即ち、現在を焦點とした歴史的研究と人間學の新しい出現である。宗教の任務は個人の救濟であるが、宗教的人間はそこに於て救済が可能であるところの全體的背景に關する知識を要請する。

以上に略記した Ong 教授のアイディアはアメリカの諸大學に於けるキリスト教倫理の強固なる講座組織並に K. Stendahl (ハーバード大學) 教授が常に指摘してゐる現在キリスト教に於ける人間學的研究の臺頭の基盤となつてゐるやうである。

シカゴ大學の Milton Singer 教授のリマークは印度

古典研究と現代印度の社會に關してゐる。題は “Text and Context in the Study of Religion and Social Change in India” である。社會科學は宗教を經濟・社會學的・心理學的觀點に於てとりあつかひ “popular” な宗教を研究するに反し、ヒューマニズムはいの點を看過し、宗教的教義と歴史に集中しながら宗教的經典を跡付けてゐる。然し、かかるアプローチの相違によつて、宗教的態度や哲學が如何にして又、如何なる方向に於て社會的變化に影響を與へるかといふ點については、いくらかのミステリーを殘して來た。西歐の學者に見られる印度觀即ちアジアの宗教に於ける經濟的發展の看過及び自己否定的傾向の指摘（ショウワイスア等）或は社會科學者の言ふ如きアジアに於ける宗教の社會的研究組織や心理學的態度の缺如の指摘（Myrdal のインド社會の分析）は共に一方的に過ぎない。社會運動と哲學との相互關係を究明するための新しい方法論が要請せられる所以である。自己の立場をテキストに餘りに讀み入れたり、他文化の中に自己の文化の類似性を認識しようとしたりする失敗はマックス・ウェーバーのヒンツー教・佛教の偉れた社會學研究に於てさへ見うけられる。

他方、原始宗教研究の方面で效果をおさめてゐる社會

人類學は今、complex civilization の宗教的傳統の研究にその方法論を適用し cross-cultural comparison を強張する。これにも起つて幾多の問題を教授は分析しその解決の最も有望な指針として Redfield の言ふ傳統の社會的機構としての civilization の概念を紹介する。即ち文明は結婚・通商・政治組織・宗教的行者、更には大衆なる仲介者等によつて結合された傳統の社會的機構の謂であるといふ。いの Redfield の方法論はインドに於ける宗教的社會的變化の人類學的研究に有意義な結果をもたらすであらう。かくせば、人類學的方法論の領域は擴大され、原典研究の學者の貢獻をもうけ入れうる可能性を開くであらう。

東洋美術専門のハーバード大學 Benjamin Rowland のリマークは “Religious Art, East and West” である。美術史上、東西兩洋の相互影響について論究することは多いけれどもローランド教授はそれ以外に兩者の共通地盤を古代東洋的世界に求めようとする。ガンダーラのインド・ロマン形式、初期キリスト教、ビザンチン美術に於けるアイコノグラフィカル・タイプは幾多の相互影響乃至一方的影響を示してゐる。然し、兩者は屢々共通基礎からして、既存せる技術・アイコノグラフィカル・タ

イプを異なつた仕方で攝取してゆく。これが注意されねばならない。更に、重要なことは共通遺産からのこれらの攝取によつて本質的に新しい宗教的形態を作り出し、各宗教の理想を各自の仕方で表現しようとする傾向である。以上的方法論を以て、教授はその共通遺産を古典的 himation 或は pallium においていとする。即ちスタイルの上で言へば、キリスト教と佛教美術の共通點は初期キリスト教とガンダーラ彫刻の共通背景がグレコ・ロマン的世界の傳統の上にある、又これをアイコノグラフィの上で言へば、古代ギリシャに於ける哲學者の風格及びアポロ・タイプの採用と考へうる。キリストと佛陀の太陽との比喩的關聯は兩者の典籍・彫刻に於て屢々見うけられる (バーミヤンの mithraic sun 或はペルマの sun chariot 等)。又、巨大な佛像は超自然的力のシンボルであり、而も、大乘に於ては釋迦牟尼のみが巨像としてシンボライズされてゐる。これはビザンチン・モザイックのクリスト像と共にギリシャ古代の巨大な彫刻にそのプロトタイプを持つてゐる。キリスト教と佛教相互の影響ではない。同様な類似はキリストと佛陀の超越的性格を表現する仕方の上にも現れてゐる。バーミヤンの壁畫に見るマイトレーヤ或はクロセツルの十三世紀のパネルに見

る如きである。又、キリスト教に於ける sarcophagi についても、それはキリスト並びに使徒の住居としての聖なる住所をかたどつたものであることは佛教に於ける淨土の表徵的形態化と同じい。

これらのことによつて知りうることはたゞ多くのパラレルが諸宗教の間に見られても、それは單に既成の形式や技術の相互影響或は導入のみによつて説明せらるべきではなく、却つて、それは傳統的諸宗教に共通した基礎的形而上學的諸概念の集散離合の結果として理解さるべきである。

シカゴ大學 John Nef 教授は現代アメリカに於て問題となつてゐるキリスト教現代思潮に關聯して “Can there be a New Christian View of History?” といふリマークを發表した。キリスト教或は非キリスト教が同時に問題としてゐる課題即ち宗教といひではキリスト教が人類に對して何をなしえたかといふ一般的課題を分析し、これを ecclesiastical history と Christology なる兩種の觀點から究明しようとする。歴史家の立場は課題の核心を見失ふべきではない。核心はキリストを信ずる彼の中でキリスト自身が如何なる役割を演じたかといふことである。歴史にキリスト自身との關聯なしに究めら

れない。ここで中世より二十世紀に至るキリスト論を歴史學の對象となる社會組織・教會・僧團の發展と比較しつつ分析する。教授はこのキリスト論と社會の歷史的展開との關聯から新しい civilization の意義を再吟味しようとやる。

civilization の出現によつて人間の理性能力が工業化の重要な要素となることを知つた人類はキリストを通じて神のもたらした charity, compassion, love を心の中に見出さうとする。その發見は civilization への信念によつて可能である。文明の創造に於ける大きな力は heart であり、heart の背後にあら力 (force) が愛に新しい意味を與へると結ぶ。

この Nef 教授の論旨特に、神と force の強調に對して、Stendahl (ハーバード大學) は鋭い反撃を加へ、談論が交はされ會は異常な空氣につつまれた。

以上、本會議で論ぜられた諸論題の中、その三種のみを擱出してみた。といふのはこの三種の論題は現代アメリカの思潮傾向と諸大學の一つの傾向を代表してゐると思はれるからである。即ち Ong の resituation of man はキリスト教倫理の強調である。大學の講座がテレオロギーと並んで廣義の實踐の問題をもくめて倫理を重視

する。更にこの問題はアラグマティズムと實存哲學の關係につらなる。J. Wild (ハーバード大學、一九六一年二月よりノースウェースタン大學哲學部長) はアメリカに於て數少くない實存哲學者の一人であるが、彼によればヨーロッパ大陸の哲學はハーバードを中心としたゼイムズの流れに見出されうるけれども南米を除き北米に擴がることは困難であるといふ。然し、ティーリッヒ哲學が北歐の傳統を承けてゐることは否定し難く、而もティーリッヒ哲學が反オーソドックスにもかかはらず、知識層に高く評價されてゐることを考へれば、大陸の哲學或は實存哲學のアメリカに於ける希望は失はれない。これはアメリカに於けるプログラマティズムと實存哲學の比較研究といふ方向を暗示してゐるといはれる。次に M. Singer のインドの宗教と社會科學の問題は世界の新しいインド研究を代表する論旨である。シカゴ大學の Eliade らを中心とする社會學民族學宗教學の研究所の樹立がその具體化の一つの現れである。但しこの社會學的研究はハーバードやエール等の東部の大學生對立的であり、後者のインド學は古典並びに言語學的研究を中心とする傾向を持つてゐる。最後に Nef の神と力とに關する議題は最も激しい論戰の中心であつた。反論したステンダール

(ハーバード大學) はノルウェー出で北歐のキケルケゴー
ル、ニーチェの傳統を受けてゐるだけにその論旨はキリ
スト教の人間學に向けられた。彼によれば、從來のキリ
スト教は人間の強さを強調して、他の一面即ち人間性の
限界を看過してゐたといふのである。これに對してエイ
ムズ教授らから、はからずも東西兩洋の宗教論が出で激
論が交換された。これは現代アメリカに於けるテレオロ
ギーと教會宗教との間に横はる看過されてゐる間隙をそ
のまま反影してゐることを示すであらう。

三 フルブライト最高教育會議

本會議は一九六一年六月十四—十八日の五日間にわたり、米國政府教育委員會議の招きで、世界四十ヶ國から選ばれたフルブライト教授中の代表四十名によるワシントンに於ける議會である。共通討論は「學問的組織の現代世界に對する責務」についてである。この共通題目は更に細分せられ、アメリカに於ける最高教育の根本的傾向と問題、學生の精神狀況、大學生と學會の責務、大學と社會、國民との關係、社會、政治、經濟的諸力と大學への影響、知識探求に於ける大學の責務の限界、國際的學者交流に對する大學の責務、現代社會に於ける人間の

最高教育の具體案等社會に對する學術的貢獻が焦點とせられた。

以上の共通討議の外に、毎朝八名づつ五グループに分かれ、學者及び政府の要人との自由論議が行はれた。このグループでは各國代表はかなり自由なアメリカ教育批判及び自國の現狀との比較論、將來のフルブライト教授採用法など具體的問題が議せられた。特に、注意せられたのは、フルブライト教授は自然科學、社會科學の分野のみでなく、人文科學面よりの參加も望まれてゐて、その間に採用率の配分はないがその、事實上、その該當者は前者の分野に多いといふことである。終會に於てなされた Dr. Charles Malik (アメリカ大學) の「現代世界に於ける人間の最高教育」と題する講演は多くの社會科學者によつて占められてゐる本會議にとつて異色あるものであつた。それは人間の本質論と宗教、哲學の現代的意義に及ぶ學術研究であり、參加者に深い印象を與へた。

米國全土にわたつて講師或は研究員生活を過したこれらの諸學者のひとしく認めたことは若い大學院フルブライト學生の顯著な成績についてであつた。從つて各國が現在のフルブライト嚴選主義を維持すること及び學問的

領域に限るべからざるに意見一致した。

以上之外、講演として印象深かるのをあげれば、Dr.

Ralph Gabrel, *The American University between two Epochs* があり、一九三一年創立のケーバード大学、

十七世紀末のベーシリトの William and Mary の設立、ヨーリタリズムをがけたヨーレル大學なる三大學の傳統から説き、大學史を通して見たアメリカのアカデミズムと宗教の關係を論じた。又 Dr. Wilson Elkins, *How the University Serves the State and the Nation* はアメリカの大學教育の特色に關係し、それが教育と研究に如何くかお強調した。

②) の Elkins の特色付けはドイツ大學の理念である Lehrfreiheit と Lernfreiheit に相當する。ただ相異せる點は、アメリカに於ける教育の理念が大學研究者に研究の自由と共に市民の奉仕精神を強く打ち出せしめるる點である。又、研究の自由が研究者に對する社會保證と學生の社會福祉制度によつて支へられてゐる點である。大學教育と社會との緊密な連繫は學生への requirement の過重ともなり、又、一つの完結した研究を要求するよりは、寧ろ廣く、研究可能の展望を要請してゐる。これはヨーロッペの諸大學と相異したアメリカに於ける研究

方向の一般的傾向といひやう。

四 アメリカ東洋學會 (American Oriental Society)

アメリカにはヨーロッペの如き諸様なアカデミーはない。政府の下で根柢あるが會議としては四種がある。即ち American Council on Education (1918 設立)、

American Council of learned Societies (1919), National Academy of Sciences-National Research Council (1863), Social Science Research Council (1924) やある。アメリカで教育、人文科學に関する會議、學會は凡て六十五種となつてゐるがその中で、最も創立の古い學會 (一七四二年) は American Oriental Society である。ヨーレル大學に本部をおか、一九六一年度の會長はこのた學會である。

その研究領域は言語・文學・歴史・考古學等廣いヒューマニティーの全分野にわたつてゐるが、他の學會と對比せしめればそれは主として古典に關はり、又、文獻、言語學研究が多く發表せられる。これに對して、アメリカに於ける近來創立せられてゐる多くの極東・インド・東南アジアの社會學的研究學會は主として現代の研究

は向かひふる。本會の出版物は *Journal of the American Oriental Society* の外に *ヤハグリヒタヘーネル* や *American Oriental Series* が續刊される。また周知の如くやある、*クーベル* 大學のホリヒナタハ・セリーズと共に古典研究の双壁を擔つてゐる。一九六一年度の學會は、*ハシルガリヤ大學* (三月二十八日) 十日、*三日間行はれた。* 諸會は、*バイブル*、*ヨルム*、*イエハム*、*櫻形文字*、*イニム*、極東研究なる六種に分かれ、*ハヌモジ* による *ハヌモジ* イギル、佛教に於ける諸問題の一一種やある。

今、この母マハーハーヴィダニ關する興味ある諸研究の概計が、J. F. Staal, Pennsylvania: A Formation of the theory of Definition in Indian Logic; G. Cardona, Penn., Rigveda śrīṇiṣé; W. H. Maurer, Library of Congress: Jaina Sanskrit as Exemplified by Muni Sumativijaya's Commentary on the Meghadhūta; L. Sternbach, United Nations: Cāṇahya's Maxims in Greater India (by title) である。又、極東部會は於てヤマト民族へ佛教と闡説する日本の著者たるA. Wayman, Michigan: The Translation from Tibetan by F. D. Lessing and A. Wayman of Mkhs Grub

rje's General Summary of the Tantras (rgynd sde spyi rnam); R. M. Smith, Toronto: Two notes on Indian chronology; R. C. Rudolph, California: The Tomb of Prince Lu on Quemony Island; Sakuntala R. Sastri, East West Institute: Rig-veda, Heritage of East and West 等である。他の者は卅人による現代による研究に關するものであつた。更に、ハヌモジによる佛教部會で發表された A. C. Soper, Bryn Mawr College: Tun-huang Evidence for the Eastward Migration of Buddhist Cults; M. Nagatomi, Harvard: Buddhism and the Brahmanic Class Distinctions は興味深く、且つ特徴的である。後者に於ては “class distinction” の概念が詮述から日本佛教に及ぼす歴史的影響の一端は暗示的である。最後に、カーリダーキュターラーの記念した講演がS. Kramrich, Pennsylvania と D. H. H. Ingalls, Harvard によるものである。

以上の學會が、三一七のやれに比して相違してゐる點は、内容的に現代問題は一層強い關心を抱いてゐるといふ、會員に若い學徒を多數登場せしめてゐる点、及び研究會前後に於ける討論形式が三一七のそれより一層自由であり、他の特色を認めらる。

界性とその學問的精神特にそのマナーはヨーロッパにまして洗練せられたものであるといふことであらう。

五 アメリカ諸大學素描

東部ではハーバード大學が創立當初を除き一七一〇年より現在に至るまでも百六十のビルと重な圖書館ワイルドナー（五百萬冊）、ホートン（十五萬冊）、ラモント（十萬冊）を持ち近代設備の完備し、學問的格調の高い點で歐米を通じて名實共に學問のメッカであることに疑ひないであらう。併し、十七世紀より二十世紀前半までアメリカの政治、教育の中心となつてゐたハーバードが現在並びに將來、近代工業化、住宅、氣候、文化の分散等の理由で舊來の位置を保ち又、保つであらうかといふことは G. Gorier, "Die Amerikaner" の指摘する如く、一つの問題ではある。中部アメリカ及びテキサスの持つ地域的性格——ヨーロッパのホームシックを保たず、獨自の國土文化の建設、權威の反動——と比較してハーバードは東部ニューヨークの地域性を深くたたへてゐる。即ち、哲學はヨーロッパ近代哲學と違つて分析哲學を中心として、宗教はピューリタニズムの強い傳統をひそめてゐるといはれ、アリストクラティックな

性格は今なほハーバード・スタイルといはれる文章にまで表はれてゐる。然し東部のコンサバティズムがニューヨークを中心とした青年間に自由思想運動展開といふ現象を引きおこさしめ、西部のロサンゼルスとは違つた理由から、東洋思想へのアプローチを促さず逆現象を呈する原因となつてゐるといふ點も見逃してはなるまい。とまれ、このニューアイランダの歴史的性質はハーバード、エール、コロンビヤなる所謂アイビー・リーグ諸大學の研究にも現れてゐる。

ハーバード大學は東部の文化的傳統を代表してゐる。従つて、研究もインド、中國、日本共に古典に重點をおいてゐる。印度學では、Materials for the study of Nāya-Nyāya Logic (HOS. 40) の著者であり國際的に著名な D. H. H. Ingalls がサンスクリット及びギータとラーマーヤナを春秋二期に講じ、リグヴェーダをも用ひてゐる。ペリー及びチベット語とインド佛教史は永富氏の分擔である。佛教では、東洋學部で Ware が中國佛教史、Pian が中國語、Wave が中國哲學を講じ、Schwartz & Yang Lien Sheng は中國史を擔當してゐる。ベルリンで教育を受けた Hightower は Han Shih Wai Chuan : Han Ying's Illustrations of the Didactic

Application of the Classic Songs の譯者であり、ドイツ語に堪能なといふから一九六一年ハンブルグ大學夏期ゼミスターに出講し、私もドイツで再會した。彼によれば、ハーバードの古典資料に對してバークレーのロサンゼルス大學は中世と現代の資料に於て偉れ、兩大學が中國研究の双壁であるといふ。ハーバード大學について、インド、佛教の専門的領域の詳述は別の機會に言ふことにして、ここでは、宗教研究一般の傾向と思潮を素描するために特筆すべき一、二の代表的要素を述べてみよう。

さてアメリカに於ける宗教研究の特色の一つは東西兩洋哲學の比較研究である。しかしこのことはヨーロッパでも大差はないが特にアメリカで注目すべきはその研究が研究機關或は研究所の名に於て東西兩洋の宗教研究が廣く行はれようとしてゐることである。文化乃至哲學、社會の比較研究とは別にこれは宗教を主目的とする。その一例。ハーバード大學に一九六一年創設せられたCenter for Study of World Religions である。このセントラルはまだ出来たばかりであるが現在神學部所屬としてスレーター教授が世話し、各國の宗教學者と連絡をとらうとしてゐる。この開所式にはイングより副大統領ラダク

リシュナンが來た。現在(一九六一)年度スレーターはインド視察中である。これに關聯した講義は神學部の宗教史の中で行はれ、宗教史の Nock, 回教と中東社會研究の Bellah, 宗教現象學の Slater, キリスト教の文獻學的研究の Stendahl、イラン宗教の Frye、キリスト教社會學者で自然法及び社會科學の講義をしてゐる Adams, Hofmann 等がある。然し、これらの諸講義がこの研究所の講義内容であつて、これ以外、專任者をおいてはゐない。この研究所の學問的目的は世界宗教の比較研究にあるが、政治的にはこれを通じて國際的理解を深め、更に、宗教的には world secularization を通じた宗教的理念の實現を求む。同じ意圖のもとで行はれてゐる學部にボストン大學の Department of Religion がある。Carl E. Purinton 部長の下でキリスト教を中心とした大學の講義が行はれるが、夏學期には特に東洋の宗教研究のセミナーが開かれる。一九六一年六月は日本、インドの宗教研究であり、筆者もまたそのコースを擔當した。ボストン大學には Amiya Chakravarty が主としてインド、中近東の宗教を講義してゐる。又、George O. Totten は宗教を社會科學との關聯に於て取り扱ふ。その成果の一つとしては Buddhism and Socialism in Japan and

Burma (Comparative Studies in Society and History, Vol. II, No. 3, 1960) がある。ところで彼は佛教に於て看過された社會運動をとりあげ、又、ナショナリズムがビルマのそれと類似してゐる過程をたどる。又、ヨルゲート大學の世界宗教史センターは Kenneth W. Morgan のもとで同じく、東西宗教比較研究を行ふが、ここではそのために特にリーディング・ルームを與へて公開してゐる。カルフオルニヤのロサンゼルス大學にゐた K. Chen は一九六一年プリンストン大學に移つたが同大學でも世界宗教研究所のプログラムが予定されてゐる。その他、ヨーレ大学の Colloquium of Buddhist Studies も大學外との交渉を保ちつつ行はれてゐるところのこの種プログラムの一つである。アメリカ東部に比較して西部は文化、人種、經濟、社會等から見て高い必要性を持つながら未だ宗教を中心とするかかる企畫は充分實施せられてゐない。社會、經濟、科學に限られてゐた東西兩洋の比較研究が宗教の分野に向けられ始めたといふことはアメリカの東洋社會への本格的内部的前進を意味してゐる。東洋研究熱といつても微々たるもので、例へば一九六〇年統計によれば、政府の外國語研究スカラシップの十四ペーントが日本語研究に向けられ、又、全米

の大學生で一九六〇年度日本語研究の學生は一一九二名に過ぎない。

この種の比較宗教研究プログラムについては勿論批判が向けられる。即ち特殊宗教を抽象した宗教一般の比較の可能性についてである。この批判は我々も同感である。然し、アメリカの大學生教育は個々の對象に早くから深入りする前にそれを諸現象の一つとして客観的に眺める訓練を行つてゐる。即ち、教育の Atomisierung が行はれてゐるといつてよい。世界宗教研究プログラムがアメリカに始めておこり、而も、根強い必然性を以て發展してゆく傾向には種々な必然的理由があるようと思はれる。特に、ヨーロッパと比較した場合、この問題は興味深い。そこには社會、經濟、政治、文化的理由もある。然し、最も重要なものの一つはアメリカの人間的コミュニケーション・セイティーの性格に支へられてゐるためではないかと思はれる。アメリカ人の間に行はれる人間的關係或は友愛は各人の性格の一一致によるグループ活動ではなくして、むしろ各人の或る對象に對して持つ關心の一一致を縱糸としてゐるやうに思はれる。異宗教者或は學者が比較宗教研究の名のもとで一致しうるのも各人の宗教への關心の一一致からである。このアメリカ人の性格はヨーロッ

ペ、特に、ドイツ人の人間的關係とかなり相違してゐる。アメリカのそれは深いよりも廣く、性格よりも關心の一一致に重點を向けてゐる。討議によつて相互が各自野のことを學びとれば足りるといふ心情が何ものにもこだはらないといふアメリカ人獨自の自由精神を生かす根柢となつてゐるやうに思はれる。もし、かく考へることが許されるならば、比較宗教研究のプログラムの將來は決して一時の現象的流行ではなくして、深く國民性にも根差してゐるといはねばなるまい。

次に起る問題はこのプログラムが何故に東部から起りつつあつて西部に行はれることが少くないかといふことである。これにも色々な理由があるであらうが、その一つは東部即ちニューライングランド地方の過去に於ける文化的役割の傳統であらう。即ち、周知の如く、それは市民戰爭前の半世紀間、アメリカ文化の中心となつておる、又、アメリカ文化の發端をなしてゐたこの地方は現在なほ、文化的意義に對するセンスとプロスペクトを他地方に先じて維持してゐるといふことである。個性的な協調的ニューライングランドは、それ故に又、逆に、過去のピューリタンティズムの傳統へのレジスタンスが強く起りうる地方である。ニューヨークよりニューライング

ランドにかけてのレジスタンスの運動はカルフォルニア地方と違つた理由を以て、却つて東洋への關心を引き起しつつある。更に、アイリッシュ・ボーランド人、イタリ人のカトリシズム及び強いプロテスタンティズムはニヨーリングランドの富豪と合して強固な宗教的組織と財團によつて支持せられてゐる。かくて、過去に指導的役割を果した文化的傳統、個性的なるものの形成並びに實動的經濟的地盤等が宗教への斷片的關心を總合的研究にまで高めようとする研究方向を取らしめるに至つたと考えられる。然し、この場合、東部は西部と違ひ、指導的立場に立つて研究を導くといふイデーは依然としてピューリタニズムに求められてゐると思はれる。

次に、哲學、宗教に關する講義は Divinity School と The Dept. of Arts and Sciences とで行はれてゐる。先にも1言した如く、ベーバード大學は分析哲學を主流とする。私の所屬してゐた Divinity School は一六三六年の創立である。當時教授及び學生は宗派的制限内に限られてゐたといはれる。現在はかかる denominational restriction は存しないけれどもプロテスタンントの多いハーバードに對してはカトリック系よりの批判—内向的だが一もかなり見られる。ここでの教授陣で異色ある教授は

新譯聖書の Stendahl で、彼はスウェーデン系として北歐的思潮の影響を強く持つてゐる。宗教社會學の Adams は國際人としても知られ、Patterson, Koester の原始キリスト教研究、Wildner の新譯聖書の哲學、Shires, Lazzaro のギリシャ、ラテン、Florovsky のキリスト文學と教義の研究、現代史に關係を持った Oberman, C. C. Wright の教會史、美術と神學の Anastos, Miller, Dawson, キリスト教哲學史の Albright がそれぞれの特殊研究に從事してゐる。

この二つの意味に於て、最も異色ある存在はドイツ人哲學者 Paul Tillich であらう。即ち、第一の意味は神學者で占めており、曾つては或る種の宗派的制限を加へてゐた本研究所が自由な哲學的立場をとるティーリッヒを迎へてゐるといふ點である。尤も教授は元來ドイツのルーテル派出身であるけれども、家庭に於ても何らキリスト教的形式を踏襲してはゐない。このことは本研究所からの傳統からの脱皮を意味する。第一の意味はハーバードが曾つてゼイムズの流れをくんだ哲學の傳統を持ちながら、その後デュイー更にアメリカ・プラグマティズムの影響のもとに現代アメリカの一般的傾向に準じていつたといふ思想史に關聯する。彼によつて再びヨーロッパ

的哲學思想が新しいよみがへりに於てアメリカ思想に影響を與へつてあるといふ意味に於てである。

ティーリッヒは春秋一期を通じて The Self-Interpretation of Man in Western Thought をギリシャ、ルネッサンス、現代文化にわたつて分析した。アルケイック的思想形態からギリシャのクラシカルな性格、又、ビザンチンのモザイックに於けるアルケイック的彫像の再生、又、ルネッサンスに來てはルネッサンス・ヒーマニズムの非劇的地盤、更に、現代文化史に入りては近代工業的社會に持ちこむ性格としての harmony の原理、實存主義的傾向、無意識の次元の發見による人間解釋の轉換を分析していく。この講義は音樂、藝術を解し高く評價する教授の人格の一面を豊かに示す最も充實した講義であり、聽講者は常に七百名位を下らなかつた。彼の他の講義即ちノイツ古典哲學、歴史と神の國は若い Richard R. Niebuhr の十九世紀の神學、現代神學及び Lehmann, Thomas, Wolf, Fletcher, Ferris, Tanis, Farman, Fairbanes 等の特殊研究と對蹠的であり、主として古典哲學に關してゐる。神學部の Dept. of Indian Studies の兩面にまたがる佛教講義の學制上の位置付けは、いづれも極めて微妙な立場にある。他

の諸大學に於けると同じく、その大學に於ける佛教學の位置付けがその講義の内容即ち文獻學的か、哲學的か否か、又、佛教學に對するアベリカの要請がどうあるかを表示する一つのパロメーターである。

Paul Tillich の哲學及びそのプロテスタンント神學者としての神學體系については専門學者の客觀的紹介を俟たねばならない。私は講義の外特に多くの個人的接觸を恵まれたため、その領域内で博士のプロトヤールを描くゝとだけにとどめよう。

さて、「神は存在しないが神を信じる」神學者と一般に信せられてゐるティーリックの哲學に對して批判的であるのは詰までもなくカトリックである。汽車、バス等で出會ふ市井の人の批判からカトリック學者の批判まで主張が力強くある。學問的批判は G. Weigel の *Contemporaneous Protestantism and Paul Tillich* (Th. Studies, XI, 1950 177-202; ID., *Recent Protestant Theology*, (Th. Studies, XIV, 1953. 573-585); G. Tavard, *The Unconditional Concern. The Theology of Paul Tillich*, Thought, XXVIII, 1955. 234-246, 等多々が、やの母 G. Weigel の批判を先生は輕々追回している。母 Weigel の The The-

ological Significance of Paul Tillich, Cross Currents, vol. VI, No. 2 1956 が G. F. McLean の *Man's Knowledge of God According to Paul Tillich*, 1958 が注意される。カトリックよりの批判の主題の一つは神の概念である。アナロギヤは繕うる解釋に關し、ティーリック曰く神學者が向けてゐれる批判の一つは神の概念である。その著 *The Courage to Be* の最後の章に述べられた God above the God of Theism を神祕主義的であるといふのである。されば確かに眞理に近いと思ふ。然し、ティーリックにあつては naturalism と supernaturalism と共に却けられねばならない。彼が Stendahl 教授の言ふやうに北歐の哲學を背景に持つてゐるが、その神學的思想は實存主義によつてもかゝれども却つて多くアリストテレスのニヒリズムに影響をひいてゐる。これは血の述べぬ如くである。ただ人間存在に關しては彼の上に實存主義の重要な影響が見られると言ふ極め。又、ティーリックの哲學を理解する一つのキーポイントは Symbol の概念であるといはれども、Symbol とはそれが表徵するよりの力に關連するものであり、

何の關興あるしない黒なつたるのを意味する Sign へ區別されねばならないとされる。それ故に先生は學生に “only a symbol” といふ點しきハーネードを取るやいへん常に禁じてゐる。G. Weigel が彼の哲學を語して「やれは存在論よりの認識論に根柢を置く Christian Keyrgma を神學的に打ち建てんとしてゐ」と謂ふ時、實存哲學者 J. Wild が筆者に語つた次の所言を思ひ起らしめる。即ち、ティーリッヒの哲學的使命はアロテスターント神學と唯物論との統合を目指す時に果たされたるであらうと。一九六〇一六一年初めまでハーベードにゐた Wild は自らの從事してゐる實存哲學研究がハーベードにも曾つてあつた。ショームズの流れがそれである。而して、自分の研究及びティーリッヒの哲學がカトリック及びピューリタニズムの傳統深いニューライングランド地方でさへ多くの青年學徒を引きつけつゝある傾向を高く評價し、希望に満ちたパスpekティブを與へてゐた。

(佐々木)

Jahr 1959)。Theonomie (Gottessetzlichkeit) は神を存在の内的目的・根據と理解するに由りて、heteronom へ解かれる危險が甚かれぬやうに心へん顧る宗教・政治に於ける Heteronomie 並びに創造と破壊なる兩方の力を持つ技術化した現代の das Dämonische へも區別せぬべくやうである。Theonomie は Autonomie (das eigenetliche Denken) と Heteronomie (fremdes Gesetz) との間に於て統一する概念であら。而も theonome Kräfte は今日隨所に働くいてゐるといふ時、ティーリッヒ哲學の使命も伺ひ知られる。何故なれば、これと共に思ひ令られるものはアメリカ大學生の精神状況である。一般的に言つて、彼等は精神的諸問題を深く追及してゐないやうに見える。然し、學問が技術化せられ、教育が atomisieren せられるところに現代アメリカを反映する思想の斷片的形態と物質化 (Verdinglichung) に対する反撥も現れるからである。」の反撥は社會の根柢をみきはめるところによつて本來的自由主義運動へ轉ぜられるものであらう。ティーリッヒのこの subjectivism が學生間に一そのニューラーザリズムの故に genuine liberal movement を醸成する一つのハーメンエーレ受け入れられたることは看過しえない

事實であらう。この liberal movement を觀して、屢々、大學生特に、東はヒューマーク、西はロサンゼルスを中心とした一部に見られる所謂 Beat Generation の Phony radical movement がある。大學生の理想主義と自己確信とがアメリカの物質的乃至思想の斷片的形態への反撥をひきおこす點で前者と變りないが、後者にあつては、極端になればニヒリズムの方向に向ふ。ニヒリズムはやがて反撥の行動性を變形せしめ、却つて現状維持といふ本來の趣旨と正反対の状態へと導くに至る。彼等は「反撥するものが何であるかを自ら知つてゐなければ、自分たる立場が何の立場であるかについて明確な notion を持つてゐないと批判される。

又まれ、genuine liberal movement として phoney radical movement としてみられる現代思潮の底流を示してゐる。特に、禪が讀まれるのは後者のグループの

間に於てである。教育の上でアメリカの大學生がこれに對して如何なるアドバイズを與へんとするかといふ問題について、私はワシントンに於けるフルブライト最高教育會議で提案したことがある。各國の代表者がこの發言を以てヒューマニストの提起した問題であるとして計らずも異常な熱心な討議が交された。私に同調した學者は「アメリカ大學教育に缺けたものである」と述べ、ボストン大學の Paul Deats、ハドニー大學 Prof K. Langer、アメリカ政府人物交流部の J. M. Espinoza が支援してゐた。私はディーン教授が印刷にしたいといふ求めに應じ、「Comments on Spiritual Life of American Students」をしてアメリカ政府に提出しておいた。

次に更に Tillich 博士の佛教への關心を中心としてアメリカの佛教への關心の根柢について述べてみたい。